

分析

The Dawn After Saddam

新生イラクに来る夜明け

時間はかかるが
イラクでも中東全域でも
民主主義は達成できる

バーナード・ルイス (プリンストン大学名誉教授)

イラク攻撃への緊張が高まるなか、さまざまな不安が表面化している。紛争の行く末や、米兵が直面しかねない危険を案じる声もある。だが、総じて根拠なき不安といえる。

イラクの「戦後」を懸念する人たちもいる。本当にイラクが近代的で安定した民主国家になれるのだろうか、と。

12年前、「砂漠の嵐」作戦に対するそなえは愚かしいまでに過剰だった。ただし戦争捕虜の受け入れ態勢だけは例外で、その点は救いがたいほど準備不足だった。

今日、イラクの正規軍はあらゆる点で当時より弱体化している。軍事的には前回より楽な戦いになるだろう。市街戦や、一般市民による抵抗も心配には及ばない。

「砂漠の嵐作戦」当時、アメリカはイラク国民にフセイン政権打倒の武装蜂起を呼びかけたが、その後は手をこまねくばかりで独裁者の弾圧を許した。イラク反体制派に対米不信があるのも無理はない。

だがアメリカが本気だとわかれば、イラク国民も喜んで協力するはずだ。アフガニスタンもそうだった。そして今のイラクは、タリバン時代のアフガニスタンよりもはるかに悲惨な状況にある。

まだ希望は残っている

欧米にはもう一つ別の不安がある。戦後のイラクに、果たして民主国家を建設できるかという不安だ。なにしろイラクには、欧米型民主主義の経験がまったくない。

逆に中東諸国には、イラクが民主国家になることへの不安が広がっている。安定した近代国家の出現は、近隣の独裁者たちにとって大きな脅威となるからだ。

イラク、ひいてはアラブ諸国の再建に関する議論には、大きく分けて二つの考え方がある。一つは、民主主義は欧米的な観念だからアラブ社会には適さないという議論。民主国家をめざした過去の努力はすべて失敗し、独裁者が戻ってきた。どう手を尽くしたところで、アラブは抑圧的な独裁者の手に落ちるに決まっている、という見方である。

そうであれば、私たちは外交努力を通じて、私たちに敵対せず、むしろ友好的であるような独裁者を据えればいいことになる。こうした考え方は、アラブの味方のように見えて実は正反対であり、現在と未来のアラブに対する無知と無関心を露呈している。

もう一つの立場は、非欧米圏に欧米型の議会政治を導入することの困難を認めつつも、相手側の伝統や理想とする政体をうまく利用すれば、どこにでも民主主義は実現可能だと考える。

戦勝国が押しつけ、あるいは旧宗主国が残していった民主主義を、それなりに成功させた例は世界にいくつもある。日本やドイツは前者だ。多くの問題をかかえながらも民主主義を熱く実践しているインドは、後者の典型的な例といえるだろう。

イラクの現体制を揺るがすことには、確かに危険が伴う。だが95～96年（内戦勃発寸前の状況にいたったが、われわれは政権転覆の好機を逃した）なら危険はもっと少なかったはずだし、91年（あと一息でフセインを追い落とせた）ならさらに少なかった。

ヒトラーの侵略も、早めに動けば阻止することができた。しかし、私たちは動かなかった。同じ轍を踏んではいけない。

ヒトラーの第三帝国に比べれば、フセインのイラクなどかわいいもの、なのだろうか。だがフセインは、ヒトラーがもっていたものとは比較にならないほどの大量破壊兵器を使ってきたし、このままほうっておけば、いつまた使うかもしれない。いま行動を起こさなければ、危険は減るどころか増え続ける。

イラクには、まだそれなりに希望が残っている。おそらくイラクは、中東産油国のなかで最も有効に石油収入を活用してきた国だ。社会インフラを整備し、小学校から大学まで優れた教育システムを築いてもきた。

さらに増える反体制派

フセイン政権によって教育システムは荒廃したが、イラクにはまだ教育を受けた中産階級が存在している。学校の施設がいかに劣悪でも、彼らは自分で子供たちを教育できるだろう。

もう一つの光明は、イラク北部のクルド人自治区の存在だ。国土の5分の1、全人口の約5分の1を占めており、その勢力はアフガニスタンに政権交代をもたらした北部同盟よりはるかに大きい。

イラク国民会議（INC）に代表される反体制派組織の存在もある。彼らを支えるのは各地の亡命イラク人であり、その数と資金力は着実に増している。

対応を誤らなければ、亡命者も国内の反体制派も、まだまだ増えるだろう。フセインが大量破壊兵器の使用を命じても、作戦を実行に移すのは現場の将兵たちだ。彼らには明確な選択肢を示してやろう。命令に従って戦後に国際戦犯法廷で裁かれるか、命令に背いて訴追を免除されるか、だ。

イラクが一夜にしてアメリカのような民主国家になることはありえない。ドイツや日本も時間がかかった。民主主義は強い薬だ。処方する量は少しずつ増やすべきだ。一度に大量投与すると、患者の命が危な

い。

しかし注意深く見守り、時間をかければ、イラクでも、そして中東全域でも自由を達成できるだろう。そうならば、この不幸な地域も、独裁と恐怖、被害者意識を捨て、文明の進歩の道に復帰できるはずだ。（筆者は中東研究の権威。近著にWhat Went Wrong? がある）

ニューズウィーク日本版

2003年1月1/8日号 P.66

©2003 Newsweek, Inc. ©2003 Hankyu Communications Co., Ltd. 無断転載・複製を禁じます。